
リョウとナオの奇妙な同居生活

岡崎 朱羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リヨウとナオの奇妙な同居生活

【Nコード】

N4377G

【作者名】

岡崎 朱羽

【あらすじ】

ホモ、亮介と元男、奈緒。二人の奇妙な同居生活が始まった！！
瀬能夏紀がおくるラブコメディーここに登場！！何処かおかしい二人が起こすはちゃめちゃに刮目せよ！！見たら評価をお願いします。
できれば感想もお願いします。評価ください。待ってます。感想ください…。

第一話『お帰り』

「久しぶりだなあ。みんな元気かなあ。」大荷物を抱えた少女がJR 駅から出てきた。ここは静岡県沼津市今沢。この少女『相澤 奈緒』の生まれ故郷である。

「ナオが帰って来る。そろそろだな。」芹沢 亮介は手紙を見ながら呟いた。

「亮介…。」奈緒は小さく呟きながらインターホンを押した。
「ナオか？今、開ける！！」亮介は親友ナオを迎えるべく、家の扉を開けた。そこには、赤毛で後ろで結んでいる長い髪の少年が立っていた。

第二話『お世話になります。』（前書き）

静岡県沼津市今沢しずおかけんぬまつしいまさわとは実在する地名で作者こと私の出身地です。因みにサッカー選手の小野選手も同じ出身地です。

第二話『お世話になります。』

「久しぶりリヨウ。」

「ナオ、久しぶり」二人は軽く握手をかわしたあと家の中へと入って行った。

時間が過ぎ、亮介の父親が帰って来た。ここで芹崎家の構成を紹介しておこう。亮介は早くに母親を亡くし父

親啓司姉、麻矢の三人暮らしだったが最近、麻矢が嫁に行った為二人暮らしとなった。それでも麻矢は弟のためにと時々家の手伝いをしにきている。今日は来ていないらしい。

「ナオ君よく来たね。」

「はい。」奈緒は答えた。そもそも何故こうな

ったかというと、奈緒の両親は金持ちで社長とその秘書をしていた。だが、交通事故で帰らぬ人となり兄弟のいない奈緒は幼なじみである

亮介の家に世話になることにしたのだ。因みに三年前に東京に引っ越したので戻ってきたのである。歳は15歳。2月24日生まれの高校一年生である。

「これからお世話になります。家事は得意なので任せて下さい。」

「うん。ナオ君には亮介の隣の

部屋を使ってもらおうとするよ。荷物はもう届いてるよ。」

「ありがとうございます。」奈緒は自分が持ってきた荷物を置きに部屋へと向

かった。光熱費、食費や学費などはしっかり払うことになった。

「はぁ…疲れたなぁ。お風呂入ろう。」

「疲れたのでわ…ボクお風呂に入ってきますね。」

「ああ。入っておいで。」

奈緒は洗面所で縛っていたリボ

ンをはずした。すると、少女の顔が出来上がった。そして、衣服を一枚また一枚と脱いでいく。最後の一枚を脱ぎおわると女の裸体があらわ

となった。そこへバスタオルを巻き浴室へと入って行った。

「はあゝキモチイゝ」お風呂は最高ね」このとき奈緒はまさかの展開にな

ると思わなかった。

つづく

第三話『二人の喧嘩』（前書き）

今のところ絶好調です。

第三話『二人の喧嘩』

「ナオ。疲れてるだろうし背中流してやるよ。」

「いや、それは困るっていうか何と云うか」

「いいじゃねえか。男同士だろう？」

「いや、そうなんだけど。も、もう身体は洗い終わるから必要ない
というか…」

「いいじゃんいいじゃん。」亮介は奈緒が入っている浴室へと素っ
裸で入った。素っ裸というのだから当然『フルチン』状態で入った。

「は！？お、女？」

「い、いやあああ！！」

「す、すまん！！」亮介は急いで浴室から出た。

「女だった。けど、ナオは男のはず…」肩で息をしながら呟いた。

奈緒は風呂からあがるとメイド服に着替えた。

「亮介…」

「ち、近寄るな女め！！俺はホモなんだ！！」

「何だよ！！あたしは奈緒よ！！」

「ナオ…相澤 奈緒は男で、お前は女だ！！」

「あゝ亮介。説明をしようか。まず、半陰陽を知っているか？」

「なんだそりゃ」

「奈緒君の病気でね。本当は女なんだけど性器が男の『チンコ』み
たいになっていてね。それを元に戻す手術が三年前に行われたんだ。
当時まで自分は男だと思っていたらしいな。」

「はい。亮介には言いずらくて…。でも、あたしを毛嫌いしないで。
」

「やだね！！女なんてクソだ！！」奈緒は遂に泣き出してしまっ

た。滝のように涙が止まらなかった。

「亮介のバカ！！」と一言だけ言い家から飛び出してしまった。それに亮介も負けずと

「女はいつも嘘をつくんだ！！俺を騙しやがったな！！出ていけ！！もう来るな！！」亮介は自室へと消えていった。

第四話『泣けるだけ泣きましょっ』(前書き)

頑張って書いてます。

第四話『泣けるだけ泣きましょう』

「はあはあ。ひどいよ…亮介。」奈緒は走り続けた。走り続けて着いた場所は海だった。

「海…」奈緒はそつと腰をおろした。もう夜なので月がとても綺麗だった。

「ここ…昔よく来た浜辺だ。何か哀しいことがあると来たっけ。」そこへ一人の女が声をかけた。

「奈緒…」奈緒は声のしたほうへ振り向いた。そこには亮介の姉、麻矢がいた。

「麻矢お姉ちゃん。聞いて」。

「そう…。亮介と喧嘩してしまったのね。私も旦那と喧嘩してここへ来たの。ここへ来ると不思議と落ち着くわね。」

「うん…」奈緒はまた泣き出してしまった。それを麻矢はそつと抱いた。

「お姉ちゃん。」

「泣きなさい。気が済むまで」美しい満月が二人を照らしていた。

「奈緒が女？そんな…騙した…親友だと思ってたのに!!」亮介は部屋の片隅で一人うずくまっていた。

「亮介…。入るぞ。」

「父さん…。父さんは知ってたんだよな。何で言わなかったんだよ。」

「すまない…。何れは言うつもりだった。お前に女の子を預かると言ったら絶対に反対されると思ったからだ。追いかける。」

「けど…」

「行け!!連れて帰って来なかったらお前をこの家から追い出す。」

いいな！！」

「わかったよ」亮介はコートを羽織り走り出した。走って走った。けれど何処にもいない。

「いない…。いや、あてならある。片浜海岸だ！！」亮介は片浜海岸へと向かった。

「亮介はね、中二の頃に同級生の女の子に騙されたの。二股だったんですって。その娘はね、亮介の扱いが酷かったの。でも、亮介はその娘が好きだからついに行った。そんなある日、その娘の彼氏が来て『よくも俺の彼女に手をだしやがったな』って言われてボコボコにされちゃったのよ。持ってたお金も全部取られちゃうし。全てを失ったわ。可哀相に…悪いのはその娘だけなのにね。」奈緒は黙って聞いていることしか出来なかった。

第五話『仲直り』（前書き）

片浜海岸も実在します。

評価お願いします。

第五話『仲直り』

「奈緒……!!」奈緒と麻矢の二人が見えた。

麻矢は亮介に気付きすつと立ち上がった。そして、亮介を殴った。

「テメー何しやがる……!!」

「何しやがる……!!じゃないわよ……!!あんた最低よ……!!」亮介の鼻から血が出ている。

「奈緒は悪くないわ……!!反省しなさい……!!」亮介は反論出来なかった。

確かに姉ちゃんの言うとおりだ。奈緒は悪くない。姿は変わってしまっただけだあの頃と全くかわつちゃいない……!!

「奈緒……。ごめんな。」

「えっ……? 亮介……」

「俺が悪かった。お前は以前となんら変わりはないのにな。姿が変わってもナオは奈緒なんだって気付いた。本当にごめん。自分のトラウマばかり気にしてお前の話なんて聞いてやれなかった。ごめん……」

「もう、いいよ。亮介が認めてくれたんならそれでいいよ。」

「奈緒……」二人は抱き合った。

「じ、蕁麻疹が……」亮介はぶつ倒れてしまった。

「きゃああああ亮介えええ……!!」説明しよう。芹崎 亮介は女に触れられると蕁麻疹が出るのだ……!!

「全くお前というやつは……」

「すみません……」

「まあいい。奈緒ちゃん。疲れたろ。もう寝なさい」

「はい。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

奈緒は自室へと向かった。着くとすぐにねこしゃん着ぐるみパジャマに着替えて寝たのだった。

奈緒が寝たので奈緒の紹介をしておこう。前に一度やった気がするがどうでもいい。まず相澤 奈緒15歳、2月24日生まれ。身長152センチ。体重ぐは!?

「女の子だから体重は秘密ですよ」起きてたんですね…。目が笑っていないよ怖い…。

つづく

第六話『登校』（前書き）

いろいろ実在のものを出しています。実在する学校名を出しています
がフィクションですので気を悪くしないでください。

評価待っています。

第六話『登校』

朝の清々しい太陽の光で亮介は目が覚めた。

「おはよう亮介」そこには、私立加藤学園の女子の制服を身に纏った奈緒がいた。

「おはよう…」亮介には引き攣った顔で挨拶した。

「今日から加藤学園に転入するから。」

「そうか…。つてええええ！？」亮介は驚きのあまりに掴んでいた卵焼きを落としてしまった。因みに食べかけ。

「そそそ、それは一緒に行くということか？」

「そうだよ。」結局亮介は奈緒と二人で登校することになった。

「なんだあの娘！！かわいい…」

「あの娘を連れてる奴は誰だ？」

「芹崎だよ。」

「嘘だろ？だってあいつは確か…。」ヒソヒソ話が絶えない。私には聞こえてるんですが二人には聞こえてないようで…。そこへ一人の少年が亮介へと話しかけた。

「芹崎。どうした？女の子連れて」

「ああ、神谷か…。ちよつとな…」

「なによ亮介、その態度は。」奈緒は少々不機嫌なようで。そんなわけで奈緒は校長室へ亮介と神谷は教室へと向かった。因みに神谷は、神谷 真平という。以後、真平で通す事にする。

「失礼します。」

「入りなさい。奈緒よく来た。」

「校長先生…いえ御祖父様。」

「そこは可愛く『おじいちゃん』と呼んでくれないか。」

「…おじいちゃん」

「ま、いいだろう。で、亮介君はどうだい」

「変わってないわ。ただ、ホモになっていたのには驚いたわね」

「何故、私がお前を引き取らなかったというのだな。芹崎 啓司を信頼しているからだよ」

「わかつているわ。それに、亮介と結婚させたいのでしょ？」

「無理にとは言わん」

「いえ。あたしは亮介の嫁になるわ。手術したあの日からずっと決めていたもの。あたしは彼が…亮介が好き。」

「ならいい。彼と高校生活を楽しみなさい」

「はい。もう行くわ」

「ああ。」説明しよう。加藤学園理事長、加藤 勇之助かとう ゆうのすけは奈緒の実の祖父である。今年で69歳になる。

これから奈緒の学校生活が始まる。

第七話『転校生いらっしや〜い』(前書き)

皆さんからの評価をお待ちしております。

第七話『転校生いらっしや〜い』

1-Dの教室に担任である古林^{こはやし} 智香^{ちか}が入って来た。

「えっと、今日は皆にいいおしらせがありま〜す」転校生ぎま〜す」女の子ですよ」男子よかったですね〜」クラスの男子達はガツポーズを決めていた。いたるところで

「おっしや〜！あの娘だ〜！」

「カモン〜」

「うっし〜！」などと言っている。当然ながらこの物語のヒロインである相澤 奈緒であるのだがまあいい。

「自己紹介してください〜い」

「相澤 奈緒です。訳があつて亮介の家で下宿させてもらうことになりました。よろしくお願いします〜！」

「「亮介!?」」

「いや。待てお前ら、ぎゃああああ〜！」亮介はクラス全員にボコボコにされた。

「亮介、大丈夫？」

「んなわけないだろ〜」亮介は気絶してしまった。亮介が気絶している間奈緒は質問攻めにあっていた。例えば…

「スリーサイズは？」

「ないしょ〜」

「彼氏いる？」とか。有りがちな質問だらけだった。

そんな訳で昼休み。亮介にある異変が〜！

「よ、ヨッシー。昼一緒に食べないか。」

「うん。いいけどなんで照れてるの？」

「…惚れてないからあ〜！…（いや、本当は君の事が大好きなんだ〜！かわいいし、素敵だ〜！）」

「あの、何が？」

「いや、なんでもない…」

毎度恒例の説明入りまゝす」

ヨッシーこと吉岡^{よしおか} 宏明^{ひろあき}はいわゆるかわいい系の少年である。どこかで言ったが亮介はホモなのでヨッシーに惚れているのだ。

「でねでね」そのときに　ちゃんできてさあ　って言ったんだよ。面白かったなあ。ってセリ聞いているの？」

「（かわいいかわいいかわいい！！ハグしてしまおうか。ヨッシー、俺は愛している！！）んあ？ああ。」因みにここは屋上なのだがドアが当然開いた。すると奈緒が現れた。

「りよゝうゝすゝけゝ。何故あたしを避けるのかしらね？」亮介は奈緒の耳元で言った。

「俺はホモだと言ったはずだ！！女に興味はない！！」

「なによそれゝ！！」奈緒は怒って言ってしまった。

因みに奈緒は小さい声で

「あたしは亮介を愛しているのに」なんて言っていたりする。

つづく

第八話『チュッチュッチュー』（前書き）

皆さん、評価待ってます。評価ください。

第八話『チュツチュツチュー』

午後は体育だった。加藤学園では男女混合で行う。（実際は知りません）男子達は奈緒のブルマ姿にハアハアしていた。そんな中亮介ただ一人はヨッシーの体育着姿にハアハアしていた。ヨッシーはハアハアしてません。

奈緒は亮介をみつけると抱き着いた。

「亮介〜」

「ああああ！！」奈緒に抱き着かれた亮介は悲鳴をあげた。

「「はあ！？死にてえのか！？」」クラス全員が声を揃えて言った。その結果、亮介は保健室へと連れていかれた。また、フルボッコにされたので。そんな訳で保健室。保険委員であるヨッシーが付き添いで行った。

「んー…ここは？」

「保健室だよセリ」

「あ、ヨッシー（うれしいぞ、君が付き添いだなんて。もう、死んでいいや…。いや、ヨッシーの為に死んでたまるかあ！！）」バサッと音をたてて亮介は起き上がった。

「今何時だ？」

「ん〜とね〜」

「（その仕草がかわいい！！ハグしたいハグしたい！！てか、ききき、キスしたい！！）」口がタコチューのようになっていて気持ち悪い。はつきり言って不潔だ。

「???」ヨッシーは訳がわからないって顔をしている。そりやそうだろう。突然タコチューの口をするのだから。亮介はキスしたいらしいのだが…。そこへ奈緒が乱入！！

「亮介！！大丈夫？」

「奈緒…すまん。心配かけて。」

「もお、心配かけさせないで。チュッ」奈緒の唇が一瞬亮介の唇に触れた。

亮介は口をぱくぱくさせながら「…（ななな、何イイイ）？ファーストキスはヨッシーのためにとっておいたのに！！）」口をぱくぱくする様子がとても面白かった。そのあと三人は教室へと戻って行った。

第九話『ただいま』（前書き）

評価ください…。待ってます…。

第九話『ただいま』

奈緒は家につくなりメイド服へと着替えた。夕食の支度をするのだ。ぶつちやけ私好みです。いたた…

「うるさいわね。」すみません。

そこへ亮介が帰宅した。

「お帰りなさい、あなた」

「すいません。家間違えました。」亮介はドアを閉めた。しかし

「じゃねえよ！！なんだその格好！？」驚くのも無理はないだろう。何せ『メイド』が家にいたのだから。奈緒だけ。

目をあわす事なく亮介は自室に向かった。

「驚いた…奈緒め」とかいいながら亮介も家の中では真っ裸だった。隠せよ！！

「奈緒…腹減った」

「はいはい。あと少しでできるか…ら…。」奈緒は言葉を失った。言葉にできねえ…ってやつ。

「いやああ！！」

「わ、わり…い…」亮介も言葉を失った。何故って？奈緒が亮介の息子を蹴ったんです。可哀相に…。男性の皆さんはすかさず押さえるでしょうね。ま、書いてる私も押さえています。押さえるときって妙に身体がくの字になりますよね（笑）…。亮介はまた倒れた。そういうば奈緒って今は女の子に戻ったけど最近まで男の子でしたね」。

「忘れたわ。そんなもの。あたしは女の子よ」そうですか…。

時が過ぎ食事時。啓司も帰宅し、三人での食事となった。

「奈緒ちゃん、この肉じゃがうまいよ」

「おじ様ありがとうございます。」

「うん。今すぐに亮介の嫁に来てほしいくらいだよ」

「やだおじ様ったらん♪当然亮介の嫁ですよ♪ていうかあゝもう夫婦みたいなものじゃないですかあゝ」

「ハハハ。そうだな♪そのときはお父さんと呼んでくれ♪」

「もちろんですわ♪」

「（冗談じゃねえ！！俺は同性愛者でヨッシーが好きなんだ！！出来ることなら結婚したい！！）」

「どうした？」

「いや。なんでもねえ。風呂入って寝るわ。奈緒覗くんじゃねえぞ！！」

「逆でしょうが！！」逆ですね。最近亮介君がバカキャラへと変化しつつある。

第十話『それぞれの休日』（前書き）

皆さんどんどん感想を書いてください。待ってます。

第十話『それぞれの休日』

奈緒が来てから初めての休日。因みに来たの日曜日。日にちを言えば、6月11日である。（去年の曜日です。）

なので今日は6月17日土曜日である。奈緒は居間でゴロゴロしながら同人誌を読んでいた。

注意 奈緒ちゃんはアキバ系ですので会話するときはアニメの話をしないほうが…でないと染められるのだ…！！因みに奈緒ちゃんにガンダムのお話を持ち掛けた秋葉くん（誰だよ！！）が見事染められたのである。

そんな秋葉君。彼は自分の苗字にコンプレックスを抱いていた。しかし、奈緒おかげ（？）で気持ちが和らぎヲタクへと変貌を遂げてしまったのである。因みに名前は秋葉 あきは ゆうすけ 裕介。以後アキバでよろしく。

話が大幅ズレてしまったが…まあいい。

そして、亮介はというと…部屋にこもって何かをやっていた。ガンブラを作っていた。何を作っていたかはご想像にお任せしよう。

啓司は…こちらでも部屋に籠っていた。何故か？それは秘蔵の工口本やモザなしAVを一生懸命隠してたのだった。一応女の子が同居しているのでバレたらやばいのだ。因みに亮介はAVなんて見ません。いつもヨッシーの妄想で頭いっぱいであった。

再び奈緒はと…あ、ギャルゲーやってますね。PCのだと18禁シーンが多いのであってPS2でやっていた。因みに『はびねす！』

をやっていた。

因みに私はメインヒロインではなく準が好きです。（やった人じゃねえとわかんねえよ！！）

おっところで啓司さんが部屋から出て来ましたね。向かった先は…倉庫だった。何故か？秘蔵のエロ本やモザなしAVがまだ沢山あるからだ。隠さないとね。そして、時刻は夕方5時となった。奈緒は夕食の支度を始めた。そこへ啓司が来て

「今日は私の分はいらない。出かける。」

「そうですか？わかりました。気をつけてくださいね」何も知らない奈緒であった。実は啓司、今日のは出会い系サイトで知り合った女の子とあうのだった。因みにAV男優の仕事もちよくやってるのだ！！そんな訳で女の子と待ち合わせは啓司はラブホへと向かった。

第十一話『亮介の記憶』（前書き）

お待たせしました。

第十一話『亮介の記憶』

「りょうくん…」

「なおちゃん、泣かないで。僕が、なおちゃんを護るから。」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

夢を見ていた。それは小さい頃の記憶。当時俺達は、八歳だった。奈緒と俺は幼なじみだった。このころはまだ奈緒は男の子だけど女の子の格好をしていた。いわゆる性同一性障害者だ。それがいじめの原因で奈緒はいじめられていた。そんな奈緒を俺は、いつも護ってきた。

「あたしね。りょうくんのおよめさんになりたい♪」

「うん。僕が君のお婿さんだ」

「約束だよ♪」

「ああ」

俺は、奈緒の為にホモとなった。

「なおちゃん！！なおちゃん！！死んじゃ嫌だ！！」

彼女は、交通事故にあった。

「なおちゃん！！目が覚めたんだね。」

「？……君誰？奈緒って僕の名前？」

「えー？」

なおちゃんは記憶喪失となった。何も覚えていない。俺のこと、友達のこと。家族ですら。もう、俺の知ってるなおちゃんは帰っていない。そう思った。そして、俺もなおちゃんのことは全て忘れた。

「昔の夢か。しかし、何故に作者ではなく俺目線？ま、いつか。」

亮介は制服に着替えた。今日は学校なのだ。居間には父さんと奈緒が席に着いていた。

「おはよう亮介。朝ご飯食べよ」

「ああ。おはよう」

とりあえず、俺がホモである事と真実は黙っておこう。いや、ホモは誰にもバレちゃいけないな。やばいだろ。てか、奈緒はなおちゃんに記憶を取り戻しているのだろうか。いつかは言わなくちゃな。

第十二話『思い出した』（前書き）

大変お待たせいたしました。

第十二話『思い出した』

曜日は水曜日。今日は調理実習。それぞれがエプロンを身に纏っていた。やはり、奈緒の姿は破壊的だった。まあ、いつもの格好なのだが…メイド服はないだろ…。他の女子も負けずとお気に入りのエプロンをしているので娘たちが多かった。

「ヨッシー…かわいい…」と亮介は呟いた。何故だか奈緒に聞こえ奈緒はおもいつきり亮介を叩いた。しかし、学習したのか亮介は見事かわした。

「亮介!!」

「くっ!!何しやる!!」

「あんたが他の子見てたのが悪いんでしょ!!」

「俺の勝手だろおがぁ!!」

「うるさい!!うるさい!!うるさい!!」奈緒はぶいっといっ
てしまった。

「ったくなんなんだよ」

「まったく。お前は罪な男だよ。」

「神谷…ほっとけ…」神谷は呆れたと言わんばかりの顔をして自分の持ち場に戻った。

もう、亮介のバカ!!バカ!!バカぁ!!心の中で叫んでも意味ないわね…。

さて、神谷にこう言われた。

「追い掛ける」と。俺は悪くない。ってか女見てねえし!!男だし!!俺ホモだし!!ってカミングアウトすることねえか…。追い掛けてみるか。

「奈緒!!」

「何よ!!」

「俺の話を聞いてくれ!!」

「嫌よ!!」奈緒は逃げる。しかし、亮介は手を掴んだ。そして

「俺はホモだ。吉田が大好きだ」

「さ、最低!!不潔!!」

「だけど!!お前も好きだ。俺は思い出した。ホモになったのは当時お前が男だったからだ!!」

「あ、あたしのせいだっていうの!?でも、思い出してくれたんだ。奈緒はぼろぼろと泣き出した。

「お前も記憶が戻ったんだな。泣くなよ」

「亮介!!」亮介はそつと奈緒の頭を撫でた。

「ああ、ヨッシーの事は本気だ」

「……………最低!!」

「ぎゃあああ!!」奈緒の説教と亮介の悲鳴が鳴り響いたとき。

第十三話『亮介の鼻血が新たな事実への鍵』（前書き）

お待たせしました。

第十三話『亮介の鼻血が新たな事実への鍵』

六月も下旬となりもう暑くなった頃。事は起こった。

そう、水泳である。プール開放だ。ここは、各自水着が自由の為、何人かはビキニを着ていた。ちなみに奈緒もビキニだったりする。すべては亮介のために…。

「（ヨッシー…。エロティック！このムダ毛一つない白い肌。反則だろー！！）」亮介はいつもに増して鼻血を流していた。

亮介が鼻血を流していることに気がついた奈緒は亮介にこう言った。

「へえ、あたしの水着姿見て鼻血出したんだ」

「ばっ！！ちげえよ！！」

「じゃあ何？また別の子？」

「くっ！！」奈緒は亮介を殴りながら言った。

「亮介のバカ！！あたし以外見るなあ！！」奈緒の叫びに反応したクラスメートたちは、一斉に亮介を睨んだ。ところどころでヒソヒソと

「芹崎が浮気！？」

「うわあ、奈緒ちゃんかわいそ」

「芹崎サイテー」と言っていた。どうも亮介に聞こえたらしく

「おおお、お前ら。ふふふ、ふざけんじゃねえ！！」と叫んだのだがすぐさま全員から

「「どっちだ！！」「」とツツコミを入られたのであった。

お待ち下さい。

もう少し待って。

あとちょっと。

亮介が同級生達にボコボコにされ、気絶しているので鼻血の理由を語ろう。原因は彼、ヨッシーこと吉岡 宏明くんにある。彼が着ているのは…スク水なのだぁ!!（何故に？）

実は彼、性同一性障害者なのである!!（初耳だなオイ）。よってスク水姿なのである。誰もが驚いた。まあ一任称はボクなのだが…驚くよね。

そんなわけでプール開きは終わった。

おまけ

女子更衣室にて。

「奈緒ちゃんのおっぱい形いいわねえ〜揉んじゃえ〜」

「ひゃうっ!!」

「もう、ちかちゃん（先生ですよ。読者の皆さん覚えてますか？）やめてあげなよ〜」

「いいのよ〜。いくつ?」

「でい、Dです…。」

「マジで!?」と女子達ではなくのぞき見していた男子達が一斉に言ったのだ。

「あんたたち…しねえゝい!」奈緒の叫びがこだました。

おまけのおまけ

先程のぞき見をしていた男子達なのだが…奈緒によって肉へんへと変えられたとさ。

(死んでないんで殺人じゃありません)。

第十四話『夏季学校はいろいろ忙しい 一日目』

今日からなんと三日間、夏季学校である。平たく言えば自然教室である。

バスの中にて。

亮介とヨッシーは隣同士だった。二人して赤面している。奈緒はと言うと一人座席でいじけていた。

「（ヨッシー）」

「（リョウくん）」こんな感じ。

「亮介のバカ…」こんな感じ。

かくして一行は現地へと到着した。着いたのは12時でそれぞれ家から持ってきた弁当を食べ、夕食である定番のカレー作りに専念していた。

今回ヨッシーが着ているのはなぜかメイド服だった。奈緒に関してはいつもどおりメイド服だった。

男子達は火おこしやまきわりなのだが…女子にオカマが加わっていた。

そうヨッシーである。何せメイド服なので野菜を切っていた。なぜ

か奈緒が大体の指示をしていた。ちかちゃん一人暮らしのくせに料理作れないから。じゃあ普段なんだよってツツコミたい人の為に答えよう。店屋物だ。ファミレス行ったり、コンビニで食料調達しているのだ。てなわけで奈緒が指示を出していた。

待ちに待った夕食を終え、ついにお風呂の時間がやってきた。普通ならばエロを取り入れて女風呂なのだが私は男風呂での出来事を語ろう。

温泉から湯気が出る。皆が疲れを癒す風呂。ここは『男湯』である！！

ショートカットの少女、胸はないがスタイルはそこそこ。それでいて下半身には　　がついている。まあ、男だから当然んだけど、そんなヨッシーに男子達は不覚にも萌えてしまった。そして、亮介を見つめにこりと笑った。なぜだかはわからないが亮介はいきなりヨッシーを押し倒した。そして

「ヨッシー！！俺は、ずっと前からお前が好きだった！！」衝撃的な告白であった。その場にいたすべての人間が聞いてしまった。当然女湯に聞こえないわけがなく、奈緒は怒り狂っていて必死で友人達が押さえていた。

「いや。あの…」

「「へえ…。そんな趣味だったんだ…。どうぞ、続けて下さい…」」

「男子達は一斉に言った。ヨッシーはヨッシーで

「続けて」なんて言っている。

とりあえず、皆風呂から退散した。

亮介の元へ奈緒が来て

「へえ…。ヨッシーのほぅがかわいいもんね！！あたしなんかあんたにとつてただのメイドでしかないのよね！！もう知らない！！」
奈緒は亮介を一発殴り自分の部屋へと帰っていった。亮介は座りこんだままピクリとも動かすただ俯きながら
自分のバカさに笑っていた。

第十五話『仲直りと新たな問題』

「亮介のバカ…」

「最悪…」

「あいつ奈緒泣かした」

「奈緒ちゃん泣かないで。ね？」友人達は奈緒のことを本当によく思っていた。

わかんねえよ…。奈緒は幼なじみなんだ…。約束もした。だけどそれはちつさい頃の話だ。バカだ…。あいつ、ずっと信じてたのかよ。記憶を取り戻してからずっと…。俺と結婚するために…奈緒。奈緒！！奈緒…！！

夜風にあたろうかな…。嫌な事があったし。

「奈緒…」

「話しかけないで…」

「昔はいじめられっこでよく助けたっけ」

「…」

「約束しただろ？お前を守るってさ。だけど交通事故の後のお前の人格が変わった事にシヨックを受けてずっと忘れていたんだ。けど、思い出した。お前と結婚する！！もう、ホモである必要はない！！お前がれっきとした女だから！！ごめん…」

「バカ…」

「え！？」

「今度浮気したら殺すからあ！！バカ…でも、ありがと。やっとその一言が聞けた。じゃあさ、キスして…」

「キス…したことない…」

「大丈夫。ほら早く」

「お、おう」二人は互いに顔を近づけた。そして唇がかさなっ
「りょうくん…。りょうくんの嘘つき!!」

運悪くたまたま夜風にあたっていたヨッシーが見てしまったのだ。

「ヨッシー？ヨッシー!!」

なんで!!さつき僕の事好きって言うてくれたじゃない!!嘘つき
…。憎い…。あの女が憎い…。

「あの子…。」

「…」二人は立ち尽くしてしまった。

「ヨッシー。どうした…」クラスメート達はヨッシーを心配してい
た。

「うるさい!!ボクに構わないで!!」ずっと泣いていた。

消灯時間となり、亮介も自室へと戻っていた。

「ただいま…」

「…」ヨッシーは何も言わなかった…。

第十六話『不機嫌な少女』

「ヨッシー…」

「…」布団に包ったままヨッシーは何も言わなかった。いつのまにか二人とも寝てしまい、朝がやってきた。

定番のラジオ体操が始まった。ヨッシーは亮介の隣なのだが…手や足の広げる運動は全て亮介目掛けてやっていた。おかげで亮介は倒れ、運ばれていった。

朝食。朝だというのに男子達はガツガツと食べていた。今日は男女ペアでのハイキングがあるのだ。ハイキングではなくサバイバルだった。つまり男の見せ場。その場でくじを引きペアを決める為、誰となるかわからないのだ！！それでも男子達は希望にかけて飯を食べて力をたくわえているのだ。

「21…21はつと。零ね」奈緒は新キャラの長谷川 零とペアになった。この長谷川 零と言う少年。実は奈緒の過去を知る少ない人間の中の一人である。

「奈緒。ずいぶんと女らしくなったな。流石チヨッキンチヨッキンしてきただけはあるな」

「あはは。ちゃんと女の子よ。毎月あの日がくるもの」

「ははは。悪い悪い。そんじゃ行きますか」

「うん」こうして二人は歩き出した。

一方、亮介はというと…。

「19…19とヨッシー!?」実はこのクラス三十人いて男子が一人女子より多いのだ。そこで一番女の子らしいヨッシーが女の子扱いされたのだが…。

「…」

「オイ。すまなかった。だけど…」

「だけど何さ!!好きってくれたじゃない!!」

「あれは勢いで言ってしまったんだ。」

「最低…」ヨッシーはプイっとどんどん先に行っててしまった。

第十七話『お互い様』（前書き）

随分遅れてしまいました。ごめんなさい…。

第十七話『お互い様』

ちくしょう！！俺は、親友のヨッシーまで傷付けちゃった。最低だ…。とりあえず、今はヨッシーを探しに行かなくちゃな…。

りょうくんのバカ…。ボクは本気なのに…。君の為に今度手術するの…。

それぞれの思いがすれ違って行く。

「おおい！！ヨッシー！！」くそ！！何処だ。どこにいる。

亮介は茂みの中を掻き分けて歩いた。どこからかステキな音が聞こえるが気にしない。

一方ヨッシーは吊橋にいた。とても古い橋で今にもちぎれてしまいそうだ。その橋のまでためらっていた。

「怖い…。どうしよう…。」そんなとき、かぶっていた帽子が風によって向こう側まで飛んでいってしまった。

「ああ…。帽子…」とりにいきたい。しかし、怖くて橋がわたれない。

ん！？吊橋？誰がいる…。あれは「ヨッシー！！」

「は！？りよう君？」

「どうした？」

「関係ないでしょ！！」

「俺は親友のお前を傷つけちゃった。だから関係なくなかんかねえ。」
帽子。風で飛んじやった。」

「待つてろ…」 亮介はなんとなく吊橋をわたり帽子を手にしてまた吊橋をわたった。しかし、最後の最後で吊橋が壊れて亮介は宙づり状態になってしまった。帽子は口に加えよじ登りなんとか地面に着いた。

「ごめんなさい！！」

「へ！？」

「僕が逃げたりしなきゃ…」

「いいって。これでお互い様さ。」二人は来た道を歩き出した。そして、集合場所に着いた。このとき時刻はすでに5時を過ぎており、時計の針は5時5分をさしていた。

第十八話『終了式の後にはパーっと』（前書き）

おまっとうさんです…。

第十八話『終了式の後はいっつと』

その後の夏季学校は何事もなく終わった。そして、いよいよ終了式。体育館の中で校長のありがた〜い話を聞かなければならないのだが「校長挨拶！一同、礼！！」

「え〜。身体に気をつけてください。めんどくさいんでこれで終わり」

短かった〜！！流石は奈緒の祖父。というわけであっさりと終了式が終わり夏休み突入となった。

奈緒が友達と廊下を歩いていると理事長こと加藤 勇之介が現れた。

「理事長先生どうしたんですか？」同級生の一人が聞いた

「奈緒に用事が」

「御祖父様。何ですか？」

「いつも『おじいちゃん』と呼べと言つてろっが。」

「何？おじいちゃん。」

「お小遣やる。好きなもの買いなさい。」すると五万円を奈緒に手渡した。

「ありがと〜おじいちゃん大好き〜」と奈緒は微笑んだ。勇之介は照れながら理事長室へと戻って行った。

「あんたってあの人の孫だったのね…」

「うん…」

「つてお嬢様じゃん！！」

「うん」その場にいた同級生全員が驚いた。

場所は変わってカラオケ。

奈緒は友達と来ていた。メンバーを紹介しよう。米倉 菜々子・新^{にい}村^{むら} 穂波^{ほなみ}・橋本 愛子それに奈緒を含めた四人だ。奈緒はアニソンばかりだった。メンバー全員が腐女子なので問題なかったが。というよりアニソンやニ○動の曲のオンパレードだった。約5時間歌い尽くしたのであった。

一方亮介はというと

「何イ！？こんなコマンドがア！！」

「フン。口ほどにもない」

こちらも四人でゲーセンで格ゲーをしていた。メンバーを紹介しよう。

藤井 啓太・浅野 神・前原 雄一だ。こちらも約5時間やりつくした。亮介は一万円をすったのであった。

第十九話『夏だ！！海に行こう。』

「あぢい」と奈緒の口から何気なしに出た。

「じゃあ、海に行こう」亮介の一言で芹崎家＋αの沈黙を破った。

「綺麗ー！！」芹崎一行は海に来ていた。久々の登場である啓二はサーフィンをしていた。奈緒と亮介はというと

「コークスクリューー！！」

「何よ！！デイベインバスターー！！」

「くっ！！」水鉄砲で遊んでいた。（ガキか！！）

奈緒のＴシャツに水が掛かり透けて見えるのでちょっとエロい。亮介の物はそれに反応してビンビンである。

奈緒がジュースを買いおうと海の家に行く途中でナンパされた。

「君名前なんていうの？」

「かわいいね」

「俺達といいことしない？」とてもチャライ三人組に絡まれていた。

「いいこと？」

「そつ。楽しいことだよ」

奈緒のヤツ何してんだ？ってあれ？ナンパされてる。

「さあ」

「楽しい事」

「しようぜ」

「いや…怖い…」

そこへ亮介がやってきて

「なんだお前達か」

「おー！リヨウ」

「え！？」奈緒はわけがわからないという顔をしている

「ああ、奈緒。こいつらの言っている楽しい事ってのは麻雀だ」

「え！？」三人はウンウンと首を縦に振った。

「単なるボードゲームマニアだよ」

「ええええ！？」紹介しよう。彼らは亮介の中学時代の友人で右から南 真太郎・桂木 哲也・高橋 幸助である。全員ボードゲーム部所属の根暗メンバーだった。顔はイケメンなのだが根暗なのだ。悪い事は一切したことがないくらいだ。根暗な性格な為に全員彼女が出来たことがないのだ。イケメンなのに。

結局、麻雀をやった。

「奈緒ちゃん強いなあ」真太郎が言った。

「まあね」何回か麻雀をやった後に定番のスイカ割をやることになった。結果としてスイカを割ったのは哲也だった。皆で美味しく食べ終わりのよい帰ろうとした時に幸助がアドレス効果しようともちかけた。

こうして奈緒は三人のアドレスを登録し、家に帰ったのだった。

第二十話『思わぬヘンタイ』（前書き）

だいぶお待たせしました。久しぶりの投稿です。

第二十話『思わぬヘンタイ』

奈緒です。夏なので旅行に來ています。行き先？ハワイです。私お嬢様なのでお金に問題ありません。

「お嬢様〜！！」あ、久しぶりに我がメイドに会いました。あ、皆さんは初めてですね。この子は神島^{かみしま}冬^{ふゆ}どつからみても女の子ですが男の子ですよ。

まあ早い話オカマさんなんです。因みにまだ付いてますよ♪と、そんな事はどうでもよくってなぜ彼女（のように見える彼）が突然現れたかというとぶつちやけ家の別荘に來ているからです。なんと冬ちゃん以外は亮介しか來てません。うほ！！ニヤンニヤンできる♪あ、鼻血が！！

先ほどはすみません…。とにかく一週間はハワイにいろのだ。なんとたってお嬢様ですから♪

さてそんな私に事件が起きました！！ハワイなのに下着泥棒にいました。ああどうしよう！！あれお氣に入りなのに…。

時は過ぎ夜、今度はこちらから仕掛けることにした。そして捕まえた犯人は神崎 翼という変態で有名な同級生だった。

「なぜ貴様がいる」少々キレぎみの亮介が尋ねる。

「いやあそれは企業秘密ってことで」。「いやいや白状しろよ」。「美少女のあるところならどこにでも」。「いやいやお前も女だから！」。「私は百合だ」。「カミングアウトしちゃった！？」。「くだらない言い争いが続いた。

そんなわけで彼女も泊めることに……。てか本当にどこから湧いて出たのやら。とりあえず友達になり下着も返してくれた。御近づきの印にとぬぎたての下着をくれたがゴミ箱に捨てた。実はその下着、翌日冬ちゃんがちゃっかり着用していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4377g/>

リョウとナオの奇妙な同居生活

2010年10月11日11時27分発行